

平林初之輔「人造人間」における 〈フランケンシュタイン〉的モチーフについて

道 合 裕 基

はじめに

平林初之輔（1892-1931）は、プロレタリア文学の理論家・翻訳家としてその名を残している。また、評論活動の合間に創作も行い、独自の探偵小説を発表した。現在のところ、平林に関する研究は、マルクス主義との関わり、「転向」などの思想史的な位置付けに関するものや、彼の探偵小説論についての分析などが行われている¹⁾。つまり、社会思想史的研究と、彼の評論を中心とする文学研究とに大別可能なのである。

このような状況下において、平林の残した小説についての研究は、あまり進展していないと言わざるを得ない。これは、平林の創作活動が、政治評論や探偵小説論の「余技」とみなされることが反映されていると考えられる。思想としてのマルクス主義がかつての隆盛から失墜した今、平林は、名探偵ファイロ・ヴァンスの生みの親であるヴァン・ダイン（Van Dine 1888-1939）の翻訳者としての方が馴染み深いかもしれない。

そんな平林が、1928年4月、雑誌『新青年』に発表した「人造人間」という短編がある²⁾。人工的に胎児を生み出したとする科学の一大発見と、その顛末を描いた作品である。近年、世間を騒がせた STAP 細胞騒動を彷彿とさせる内容で、平林の代表作の一つである。この作品については、中村美里により、優生学と出産をめぐる社会情勢との関連を中心に、「マッド・サイエンス」文学という読みが提出されている（中村 2006）。中村は、「人造人間」について『フランケンシュタイン』（*Frankenstein* 1818）における〈生命の創造〉のモチーフとの共通性が見られるとも述べており、「人造人間」の成立および、『フランケンシュタイン』の受容という点に関して示唆に富んでいる。

ただし、この作品の材源については、平林は特に明言していない。平林は、早稲田大学の英文科を卒業し、アテネ・フランセでフランス語も習得した後、早稲田大学で教壇に立っていた。しかし、『フランケンシュタイン』については、読んでいたのかが判然としない。だが、〈フランケンシュタイン〉的な主題が描かれている作品という特徴は指摘出来るだろう。そこで、本論では、平林の「人造人間」における〈フランケンシュタイン〉的モチーフや、関係が予想される先行する文学作品に着目しながら、その材源の可能性について論じる。

1. 「人造人間」と〈フランケンシュタイン〉的モチーフについて

1.1 〈生命の創造〉について

「人造人間」の〈フランケンシュタイン〉的モチーフについて論じるにあたり、知名度のない作品なので、便宜上、「人造人間」の梗概を示す。

【「人造人間」の梗概】

東亜生理学会の春季大会で、村木博士が、助手の内藤房子女史とともに、「村木液」という培養液を用い、人工的に胎児を生み出したという発表を行う。そして秋季大会で、その後の経過を報告すると告げる。この発表は、人造人間の誕生ということで、学会のみならず、ジャーナリズムをも賑わす。

学会が閉会し、村木博士の研究室に場面が移る。実は、村木博士と内藤女史は、師と弟子の関係ではなく、愛人関係にあることが示される。しかも実際の内藤女史は、大学の科目履修生を中退し、学位もなく、化学の概説書を読み、これから化学式を暗記するといった始末である。村木博士は、愛人がありながら、妻と二人の子どもの前で、良き夫、父親としての顔を見せる。こうして博士の二重生活が詳細に示される。

内藤女史は、妊娠したことを知り、博士と一緒にいるために、実験を失敗させようと、密閉された人工胎児がいる実験室の鍵を開ける。しかし、そこには、ドイツ語の本が置いてあるだけだった。内藤女史は拍子抜けし、眠り込んでしまう。そこへ博士が戻り、別荘に実験器具などは、全て移したと告げる。しばらくして、内藤女史が出産する。博士の隠し子を産んだのである。

こうして東亜生理学会秋季大会が開催される。そこで、村木博士により、培養液に浸された胎児が示される。この発表は、学会や世間に大きな衝撃を与える。

しかし、阿部医学士の追加実験により、「村木液」が、ただの水に葡萄酒を混ぜただけのものであると判明する。その直後、村木博士は、モルヒネ自殺した。内藤女史と子どもが残され、遺書を読んで泣く女史の姿で物語が終わる。村木博士は、自分の隠し子を人工胎児として誤魔化そうとしていたのである。

＊

このように、村木博士の〈生命の創造〉に成功したという発表が虚偽であり、その結果、破滅に追い込まれている。〈生命の創造〉というモチーフからは、『フランケンシュタイン』と共通する主題が容易に浮かび上がってくる。

フランケンシュタインは、望まない醜い生物が完成したとはいえ、〈生命の創造〉に成功している。しかし、村木博士は、〈生命の創造〉の方法を持たないにもかかわらず、それが可能であるかのように振る舞い、世間を欺くのである。次に引用するのは、村木博士が、東亜生理学会春季大会で発表する場面である。

「人造胎児は、私のこしらえた特別の試験管の中で、無事に育っています。目下ちょうど妊娠三ヶ月位の段階にあります。(略) 困難を感じたのは栄養の補給でありましたが、内藤女史の協力によりて、この困難も突破しました。私たちは最近各種の蛋白質の合成にも成功しました。(略) 恐らく、本会の秋季大会には、報告できるようになるだろうと思われます。」博士は急霰のような拍手を浴びながら演壇を下った。(「人造人間」 p. 163)

村木博士は、虚偽の報告を行い、引用に続く場面では、阿部医学士の問いには答えず、経過を待ってほしいとだけ告げる。これは、内藤女史とのあいだに出来た子どもの成長を待つためという計算が働いているのである。つまり、通常の妊娠・出産を科学の力により誕生したと欺くつもりでいる。次に掲げるのは、村木博士が、秋季大会で、誕生した隠し子を人造胎児と偽る場面である。

博士はしずかな語調で、案外に簡単に実験の経過を報告してから、「これからその嬰兒を皆様にご覧に入れます」と言いながら、うしろの方へ眼くばせした。一人の老女が淡紅色の液体の入った硝子盤をもってきた。生後まもない健康そうな嬰兒が巧みな装置で支えられて漬かっていた。「この子供は八ヶ月でこれまでに成長しました。(略) もう一ヶ月もすれば普通の子供として育ててゆくつもりです。」

博士は報告がすむと老女を手伝って硝子盤を奥へ運んでいった。拍手の音はしばらく鳴りやまなかった。(「人造人間」 p. 181)

博士は、自然出産で誕生した子どもを、自分の作った培養液から誕生させたと嘘をついている。〈生命の創造〉を成し遂げたと偽り、その結果として、自分の生命を失うことになるのである。一方の『フランケンシュタイン』では、フランケンシュタインが、探検家ウォルトンに自身が〈生命の創造〉に成功したことを語る。次に引用するのは、フランケンシュタインが、自分の研究について語る場面である。

わたしがここに断言することは真実なのです。これをもたらしたのが何かの奇跡だったとしても、発見の経過は明瞭で納得しうるものでした。昼も夜も信じられぬ苦心と疲労を重ねた末に、わたしは発生と生命の原因を解き明かすことに成功した、いえ、それどころか、この手で無生物に生命を吹き込むことも出来るようになったのです。

(『フランケンシュタイン』 p. 68)

フランケンシュタインの語る内容は、にわかに信じがたいものであるが、そのことを証明するかのように、〈怪物〉が、ウォルトンの前に姿を見せるのである。フランケンシュタインは、〈生命の創造〉に成功したものの、その生命に対しての責任を放棄している。棄てた理由は、自身の

生み出した生命が、予期せず醜いものであったからで、造物主としての役割を最後まで果たしていないのである³⁾。この〈生命の創造〉に成功したために、フランケンシュタインは、身の破滅を招くことになるのである。

破滅という点では、『人造人間』の村木博士も、〈生命の創造〉に着手し、結果こそ失敗であったが、そのために身を滅ぼしたのである。衰弱死と自殺という相違はあるが、〈生命の創造〉に着手したがゆえに、破滅した科学者の物語という点では、この二つの作品は共通していると言える。

1.2 〈怪物〉の登場

『フランケンシュタイン』では、強烈なインパクトをもつ〈怪物〉が登場する。この〈怪物〉のイメージは、1931年に公開されたジェイムズ・ホエール（James whale, 1889-1957）監督の映画『フランケンシュタイン』（*Frankenstein* 1931）でボリス・カーロフが演じた〈怪物〉の影響が大きいが、『フランケンシュタイン』というと〈怪物〉がイメージされるほどになっている。原作の〈怪物〉は、フランス語を話し、複雑な思考にも耐えうる高い知能をもつが、外見の醜さで迫害されている。次に掲げるのは、生み出された〈怪物〉の外見描写である。

四肢は均整がとれ、容貌も美しく選んであった。美しく！——これが美しいと！黄色い皮膚は下の筋肉や動脈の作用をほとんど隠さず、髪は黒くつややかにすらりと伸び、歯の白さは真珠のよう。だがそんな贅沢は、いっそうおぞましく際立たせるばかりでした。はめこまれた薄茶の眼窩とほとんど同じ色に見えるうるんだ目、やつれたような顔の色、一文字の黒い唇を。

（『フランケンシュタイン』 p. 74）

『フランケンシュタイン』における〈怪物〉は、フランケンシュタインの生み出した生物を指すだけではなく、創造主であるフランケンシュタインにも〈怪物性〉が見られるのである。なぜならば、通常の人間の力の及ばない〈生命の創造〉という神の領域にまで手を広げようとしているからである。次に引用するのは、『フランケンシュタイン』での、〈生命の創造〉に着手したフランケンシュタインの具体的な様子である。

わたしは納骨堂から骨を集め、瀆神の指で人体の恐るべき秘密を乱しました。建物の最上階の孤独な部屋、というよりは独房に近い、他のどの部屋からも廊下と階段でへだてられた一室に、わたしは穢れた創造の仕事場を置いていました。作業の詳細を見ようとして、眼は眼窩から飛びださんばかり。解剖室と食肉処理場から材料の多くは得られました。

（『フランケンシュタイン』 p. 71）

引用からは、フランケンシュタインが、死体などを材料として集めたことが示唆され、それら

の材料に手を加えたと推測される。通常では行い得ない〈生命の創造〉に専心し、成功させたフランケンシュタインには、人間を超えた存在として〈怪物性〉が付与されるのである。

他方、「人造人間」では、〈生命の創造〉に成功していないので、〈怪物〉は登場しない。だが、村木博士は、フランケンシュタイン同様に〈怪物性〉が認められる人物である。フランケンシュタインよりも技術は劣るものの、著名な化学者として知られており、自身の悪徳を専門的知識を利用し、隠蔽しようとしている。そして、世間では、紳士として振る舞っているのである。次に引用するのは、村木博士の二重生活についての語りである。

博士は、家庭においても善良な父であり夫であることに依然として変わりはない。房子を抱擁したその同じ手で子供たちを愛撫した。房子に恋を囁いたその同じ口で夫人と談笑した。そしてまた世間に対し、学界に対しては、博士は模範的紳士であった。完全な二重生活を博士に見ることができた。
(「人造人間」p. 179)

村木博士が、愛人である内藤女史と関係を持ちながらも、家族の前では良き父、良き夫を演じていることが示される。このことから、村木博士の偽善者ぶりがうかがわれ、家族や生まれてきた子ども達を不幸にしている〈怪物〉であることが見て取れるのである。村木博士とフランケンシュタインは、ともに〈怪物性〉を帯びており、生まれてきた自らの〈子ども〉を不幸にしているのである。〈怪物〉とは、異形存在を指すだけでなく、倫理的な欠落者をも意味していることが、『フランケンシュタイン』、「人造人間」双方から浮かび上がってくるのである。

1.3 プロメテウスの性格について

前節では、「人造人間」と『フランケンシュタイン』における共通要素として、〈生命の創造〉、〈怪物〉の出現などについて概観してきたが、続いては、この両作品における主人公達のプロメテウスの性格についての考察に移りたい。

『フランケンシュタイン』の副題は、「現代のプロメテウス」である。この副題は、フランケンシュタインによる〈生命の創造〉のことを指し示しているとみなされている。これは、ギリシャ神話での人類に火をもたらしプロメテウスが、文明化の礎を築き上げたので、〈生命の創造〉という科学の発展に寄与するフランケンシュタインが擬えられている。ただし、実際には、フランケンシュタインの研究成果は、人類の発展に寄与するものではなく、彼の周囲の人々を不幸にしているという皮肉が見られる。フランケンシュタインに擬えられるプロメテウスには、ギリシャ神話が伝えるところではエピメテウスという弟がいる。エピメテウスは、兄と異なり、後先を考えずに行動し、それゆえに人類にパンドラと災いの入った容器を引き入れることになる。

こうした神話を踏まえるならば、フランケンシュタインは、副題のプロメテウスよりも、むしろエピメテウスにその性格に近いように思われる。これは、エピメテウスの名前の意味にも関わっている。プロメテウスは、「先に考える者」の意味であり、エピメテウスは、「後で考える

者」の意味である⁴⁾。実際、ギリシャ神話でのプロメテウスは、慎重で、豊富な知識を有している。一方のエピメテウスは、思慮深さが無く、考える前に行動をしている。フランケンシュタインは、研究成果の完成を考え、その結果、引き起こされる出来事については考えていなかった。それゆえに、プロメテウスの性格よりも、むしろエピメテウスの性格が強くなっていると考えられるのである。次に引用するのは、悲願であった〈生命の創造〉の結果に失望するフランケンシュタインの心情である。

ときには疲労と極度の衰弱から今にも地面にくずおれそうになる。そんな恐怖とまじりあった、幻滅の苦さもなめました。長いことわが身の糧ともこころよい休息ともしてきた夢が、今は地獄になったのです。変化はかくもすみやかに、負けはかくも完璧でした！

(『フランケンシュタイン』 p. 76)

フランケンシュタインは、偉業を成し遂げたものの、完成した成果について不満足であり、嫌悪し、忌避している。これは、〈生命の創造〉が、どのような形を採って現れ、かつ、どのような結果をもたらすかについて考えていなかったがゆえの顛末である。「先に考える」ことがなかったため、フランケンシュタインと生み出された〈怪物〉は、不幸なその後を辿ることになるのである。このように、〈生命の創造〉を成し遂げたという点では、プロメテウスの性格を帯びるが、エピメテウスとしてのフランケンシュタイン像が、〈怪物〉の誕生によって見出せるようになる。

フランケンシュタインのエピメテウスの性格からの脱却は、〈怪物〉から、伴侶となる女の怪物を製作してほしいと頼まれたのを契機とする。一旦は、引き受けるものの、製作過程で、女の怪物がもたらすかもしれない悪徳に思い至るのである。次に引用するのは、女の怪物を製作中のフランケンシュタインの思索である。

坐っていると、一連の想念が心に浮かび、自分が今おこなっていることの結果へと思いは向いてゆきました。(略) 女のほうも思考のできる理性ある生き物になるはずだが、自分の創造以前に交わされた契約には従わないと言うかもしれない。彼らがたがいを憎むことさえありうるのだ。すでに生きている怪物は、わが身の醜さをいとわしく思っており、それが目の前に女の姿で現れたなら、いっそう激しい嫌悪を抱きはしないだろうか。相手もまた彼を嫌って、よりすぐれた人間の美を求めようとするかもしれない。女は去り、彼はまたひとりになって、自分と同じ種の生き物にまで見棄てられたと新たな怒りを燃やすことになるかもしれない。

(『フランケンシュタイン』 p. 217)

フランケンシュタインは、女の怪物が邪悪な性質を持ち、ヨーロッパを去るという〈怪物〉との約束を守らないかもしれないという危惧を抱いている。それだけでなく、女の怪物が、〈怪物〉

を拒絶する可能性などに考えが巡っている。フランケンシュタインが想像したような展開が起らないとは言えないが、ここに至って、フランケンシュタインは、慎重に考えをまとめている。〈怪物〉の製作時には、思いもよらなかった結果にまで踏み込んで、考えられるようになっているのである。これは、前回の失敗を教訓にして、慎重になっているからとも読めるが、プロメテウスの神話を踏まえるならば、フランケンシュタインがようやく、エピメテウスの性格を脱し、プロメテウスとしての性格を強めているとも解せるだろう。

「人造人間」の村木博士もまた、フランケンシュタイン同様、プロメテウスの性格とエピメテウスの性格が同居した人物と言える。村木博士のプロメテウスの性格は、フランケンシュタインと同じく、〈生命の創造〉に挑む科学者という属性から生じる。村木博士は、実際には、〈生命の創造〉の研究はしていないが、〈生命の創造〉に専心しているように演じている。次の引用は、人造人間を培養しているように見せる村木博士の〈演技〉である。

博士は一日中実験室にとじこもっていた。隣室からは博士の忙しそうに歩きまわる登音のあいまいに、水道の水のほとばしり出る音、硝子器のふれあう音などが、かすかにきこえ鋭敏な鼻にはほのかな薬品の匂いさえかぐことができた。 (「人造人間」 p. 180)

村木博士は、〈生命の創造〉を行うことは出来ないが、有名な化学者であることを悪用し、愛人とのあいだに出来た子どもを人造人間と称するため、苦心しているのである。村木博士が、このようなプロメテウスの役割を果たさなければならなくなったのは、後先考えずに、愛人である内藤女史とのあいだに子どもを設けたためである。この点で、村木博士にも、「後で考える者」であるエピメテウスとしての性格が見出せるのである。このエピメテウスの行動の後始末として、プロメテウスの役割が必要となるのである。次に掲げるのは、内藤女史が密かに出産した場面である。

十月の末のある晩、村木博士の別宅の付近にたつて、鋭敏な聴覚をもった人が、よく耳をすませば、博士の邸宅から、かすかに嬰兒のうぶ声を聞きわけることができたであろう。むろん房子が分娩したのである。けれどもこのことは誰にも知られずにすんだ。

(「人造人間」 p. 179)

この子どもを、人工の胎児として世間に発表することを、妊娠発覚の後に村木博士は思い付いたのである。そのため村木博士も、フランケンシュタイン同様に、プロメテウス、エピメテウス双方の性格を帯びるのである。以上のように、『フランケンシュタイン』『人造人間』には、ギリシャ神話のプロメテウスとエピメテウスの性格が、主人公に付与されているのである。主人公達の属性からは、これらのテキストを、神話の変奏として捉えることが出来るのである。

2. 〈悪女〉としての内藤女史

前章までで、『フランケンシュタイン』と「人造人間」の主人公達の形象などを見てきた。本章では、「人造人間」において、村木博士とともに、重要な役割を演じる内藤女史の形象について考察する。内藤女史は、卒直に言うと、化学の研究をしていくのに不向きな人物である。村木博士の共同研究者ということになっているが、化学の知識は皆無で、学歴も詐称している。そして村木博士の破滅の原因となった。加えて、失敗に終わるが、博士と一緒にいるために、研究を壊すことも厭わないような人物である。

そんな内藤女史が、テキスト中では、「クレオパトラ」の言葉を想起している。この描写は、内藤女史という人物を端的に表現しているように思われる。次に引用するのは、内藤女史が、博士の研究を駄目にして、自分との逃避行へと追いこもうと思いつく場面である。

彼女は、博士の大事な実験を減茶々々にして博士を世間へ顔向けのできぬようにし、どこか地球の果てというようなところへ行って自分と二人で恋愛三昧の生活を送ろうと考えたのである。一世界をも恋故に―クレオパトラの言葉が彼女には絶対者の暗示のように思い出された。

（「人造人間」p. 177）

このように、内藤女史には、〈悪女〉としての「クレオパトラ」のイメージが重ねられている。〈悪女〉としてのクレオパトラ像については、夏目漱石（1867-1916）が、『虞美人草』（1907）の材源として、シェイクスピア（William Shakespeare 1564-1616）の『アントニーとクレオパトラ』（*Antony and Cleopatra* 1606）を参照したことが有名である。「人造人間」においても、「クレオパトラ」という名称からは、〈悪女〉のイメージが見出せるようになっている⁵⁾。この〈悪女〉としての「クレオパトラ」のイメージは、内藤女史の次のような発言からもうかがわれる。

「そうだ、飽くまで競争しよう。完全にすっかり博士を自分だけのものにしてしまわなければならぬ。名誉も家も夫人も子供も、そして生命の次に大事な研究もすべてをすてて妾の懐へ飛びこませなければならぬ……」

（「人造人間」p. 176）

内藤女史は、村木博士の家庭や、研究を壊すことに躊躇せず、自身の利己的な感情に身を任せている。不幸か幸いか、村木博士が、実際は、人造人間の研究をしていないので、実験室には、デスクと椅子とドイツ語の本が一冊あるだけだったので難を逃れている。だが、引用からは、内藤女史が、村木夫人や二人の子ども達とも張り合う覚悟を見せており、彼女の不徳が如実に示されている。しかも、内藤女史は、婚約中の夫までおり、村木博士同様、夫を騙しているのである。

また、内藤女史の〈悪女〉としての側面は、彼女の自称にも反映されている。彼女の自称は、「妾」（わたし）である。これは、謙譲の意を込めた女性の自称であるが、〈愛人〉を意味する

「妾」（めかけ）とも読めるのである。実際、彼女は、村木博士の愛人であり、共同研究者となっているが、偽の化学者である。何とか一通りの基礎力を付けさせようとする村木博士に対して、彼女は次のように答えている。

「妾もう、そんな難しい本を教わるのはいやでございます。妾はただの女でいとうございます。先生のおそばに、いつまでも離れないで、去年の夏のように先生に愛されて……先生、妾をどっかへつれて行って下さい。誰もいないところへ、先生と二人っきりのところへ」

（「人造人間」 p. 166）

このように、彼女には、化学を学ぶことよりも、村木博士との関係を継続させ、愛情を独占することにしか関心はないのである。内藤女史の発言や態度は、彼女の浅薄さを示すとともに、村木博士の偽善者ぶりをも強調するのである。

こうした「人造人間」における内藤女史と村木博士の関係を考える上で、参照となるのが、バーナード・ショー（G. B. Shaw 1856-1950）の戯曲『ピグマリオン』（*Pygmalion* 1920）である。「人造人間」には、『フランケンシュタイン』的モチーフだけではなく、〈ピグマリオン〉的なモチーフも見られるのである。『ピグマリオン』は、言語学者のヒギンズが、訛りの強い花売り娘のイライザを上流階級の婦人として通用するように、話し方のレッスンをする。ヒギンズの試みは成功し、イライザは、やがて自立していく。

一方、「人造人間」での村木博士は、内藤女史を立派な化学者にするべく、化学の入門書を紹介したり、個人教授を行っているが、前述のように、彼女にとっては、化学の知識を身に付けることは重要ではない。この点では、『ピグマリオン』と異なるが、個人教授による変化の要請という展開は共通するのである。次に引用するのは、内藤女史と村木博士の実験室での会話である。

「でも何も知らない妾を理学者だなんて紹介して下さったときは、妾ほんとうに顔から火が出るようでしたわ」

「これから理学者になるのです。私のところで、これから半年も勉強していらっしゃれば、立派な化学者にしてあげます。寺田学士の『化学精義』はだいぶ進んだでしょう。わからんところは遠慮なくおたずねなさい。さあこれから少し復習しましょう。」

（「人造人間」 p. 166）

結局、村木博士の個人指導にもかかわらず、内藤女史は、「化学式の暗記に専念」する始末である。『ピグマリオン』のイザベラは、教養などを身に付け、最終的にヒギンズから離れるが、内藤女史は、村木博士から離れることはないのである。これは、イザベラが、上品な話し方や礼儀作法が身に付いたのに対し、内藤女史は、化学の知識がついに身に付かないという相違からくるのであろう。この〈ピグマリオン〉的モチーフは、前述したプロメテウスがもつ〈創造〉の力

とも大きく関わっているのだろう。

以上のように、内藤女史の形象には、「クレオパトラ」のイメージや、『ピグマリオン』的モチーフなどが見られ、〈悪女〉のイメージが強調されている。付言すると、フランケンシュタインが危惧した女の怪物が持つ〈邪悪〉さが、内藤女史に投影されているのかもしれない。このように、内藤女史には、〈悪女〉としてのイメージが付与されており、事実、彼女との関係が原因となって、村木博士を破滅させているのである。

3. 結末について

「人造人間」の結末で、村木博士は、モルヒネによる自殺を遂げる。村木博士の最期は、フランケンシュタインが、衰弱死するという点では異なる。だが、物語の結末において〈創造主〉の死が描かれているという点では共通するのである。次に引用するのは、「人造人間」での村木博士の最期である。

村木博士は鎌倉の実験室の中で、死体となって発見された。モルヒネ自殺であった。

(「人造人間」p. 182)

引用に続いて、内藤女史に宛てた村木博士の遺書が開陳されている。遺書では、家族、世間、学会などを欺いた報いを受けなければならないと、博士によって記されている。博士の死は、自らの不徳の露見を恐れたために引き起こされたものである。では、一方のフランケンシュタインは、どうであったか。次に引用するのは、フランケンシュタインの最期の様子である。

話すうちにその声はかほそくなり、そしてとうとう努力に力を使い果たして、黙りこみました。半時間ほど後にもう一度口を開こうとしましたが、だめでした。弱々しく僕（＝ウォルトン）の手を握ると、永久にその目は閉じられて、優しい微笑の輝きは、唇から消えてゆきました。

(『フランケンシュタイン』p. 290)

フランケンシュタインは、親族や友人などを殺害され、〈怪物〉を追跡する中で、心身ともに衰弱して死を迎えることになる。村木博士もフランケンシュタインも、生命の操作という神の領域への侵犯を行い、破滅したのである。だが、その破滅の過程では、フランケンシュタインは、人造人間を生み出したことで、災いを招き破滅している。一方、村木博士は、人造人間を生み出すことは出来なかったがゆえに、破滅しているのである。

〈創造主〉の死という結末は、「人造人間」と『フランケンシュタイン』に共通し、かつ〈被造物〉の生存もしくは、生存の可能性という点でも、両作に共通するのである⁶⁾。これは、「人造人間」での村木博士の遺児の存在を指し、『フランケンシュタイン』での〈怪物〉生存の可能

性が相当する。このことから、「人造人間」と『フランケンシュタイン』には、連続性を見出すことが可能なのである。

おわりに

平林初之輔の「人造人間」は、『フランケンシュタイン』同様に、〈生命の創造〉、〈怪物〉の登場、主人公のプロメテウスの性格などの共通点が見られた。平林が、『フランケンシュタイン』を意識していたか否かは判然としないが、「人造人間」には、〈フランケンシュタイン〉的なモチーフが見られ、ともに〈創造主〉たる主人公の破滅が描かれていた。フランケンシュタインも、村木博士も生命を弄んだがために、自らの破滅を招くのである。

以上のように、「人造人間」は、近代日本文学史上における『フランケンシュタイン』受容の系譜に位置付けることが出来るのではないだろうか。『フランケンシュタイン』の日本文学への影響についての調査を進めるとともに、平林の小説については、個別の研究が十分な状態ではないので、その着想源などを含め、考察することを今後の課題としたい。

註

- 1) 平林とマルクス主義の関わりについて論じたものとして、(前田 1980、渡辺 1987) などがあり、彼の探偵小説論を検討した研究としては、(池田 1980、菅本 1998) が挙げられる。平林の唱えた探偵小説の「芸術的価値」については、(浜田 1991) に詳しい。
- 2) 「人造人間」の本文は、『平林初之輔探偵小説選』1、論創社に拠る。「人造人間」についての先行研究は、前述の(中村 2006)の他に、平林が、未来予想で挙げた体外受精、試験管ベビーのモチーフを作品化したとするもの(大和田 1992)や、「ジャーナリズムを利用して科学上の発見だと偽って自らの悪行を隠蔽しようとするというモチーフ」を描いたとする横井司の解説がある(横井 2003)。なお、『フランケンシュタイン』からの引用は、創元社刊による森下弓子訳を参照した。
- 3) 古生物学者のスティーヴン・ジェイ・グールドは、フランケンシュタインの行動を「醜形忌避」の本能が原因であるとしながらも、〈創造主〉としての責任放棄を批判している(グールド 2000)。
- 4) プロメテウス神話については、(西村 2005)を参照した。
- 5) クレオパトラの表象については、メアリー・ヘイマーによる研究がある(ヘイマー 2003)。
- 6) 『フランケンシュタイン』の結末で、〈怪物〉は、火に身を投じて自ら命を絶つとウォルトンに告げるが、その場面は描かれず、〈怪物〉が、氷に乗って闇の中に消えて行く場面で終わっている。このように、〈怪物〉生存の可能性を残しているのである。つまり、「閉じられた終わり」ではなく、「開かれた終わり」となっているのである(廣野 2005)。

参考文献

- 池田浩士「転向と探偵小説——平林初之輔没後五十年によせて」『思想』(689)、岩波書店、1981年。
大和田茂『社会文学・一九二〇年前後——平林初之輔と同時代文学』不二出版、1992年。

- グールド、スティーヴン、ジェイ『干し草の中の恐竜たち 化石証拠と進化論の大展開』渡辺政隆訳、早川書房、2000年.
- シェリー、メアリー『フランケンシュタイン』森下弓子訳、創元社、1984年.
- ショー、バーナード『ビッグマリオン』小田島恒志訳、光文社、2013年.
- 菅本康之「探偵小説、群衆、マルクス主義——平林初之輔の探偵小説論」『日本近代文学』(59)、日本近代文学会、1998年.
- 中村美里「マッドサイエンティストの子供たち：昭和初期の人造人間文学と優生学」『機械=身体のパリテイク』中山昭彦編、青弓社、2006年.
- 西村賀子『ギリシャ神話：神々と英雄に出会う』中央公論社、2005年.
- 浜田雄介「平林初之輔試論——「大衆性」を軸に」『国語と国文学』68(2)、至文堂、1991年.
- 平林初之輔「人造人間」『平林初之輔探偵小説選』1、論創社、2003年.
- 廣野由美子『批評理論入門——『フランケンシュタイン』解剖講義』中央公論社、2005年.
- ヘイマー、メアリー『クレオパトラという記号——歴史・ポリティクス・表象』正岡和恵・橋本恵訳、ありな書房、2003年.
- 前田角蔵「平林初之輔試論：震災前後の平林の動向」『日本文学』29(11)、日本文学協会、1980年.
- 横井司「解題」『平林初之輔探偵小説選』1、論創社、2003年.
- 渡辺和靖「平林初之輔と「転向」——マルクス理解をめぐる」『愛知教育大学研究報告 人文科学』(36)、愛知教育大学、1987年.